

[学術資料]

太平洋戦争期、台湾人徴集兵における戦争体験

Conscription of Taiwan during the Pacific War
concentrating on experiences of conscripted soldiers

小 野 純 子

Junko ONO

Studies in Humanities and Cultures

No. 22

名古屋市立大学大学院人間文化研究科『人間文化研究』抜刷 22号
2014年12月

GRADUATE SCHOOL OF HUMANITIES AND SOCIAL SCIENCES

NAGOYA CITY UNIVERSITY
NAGOYA JAPAN
DECEMBER 2014

[学術資料]

太平洋戦争期、台湾人徴集兵における戦争体験

Conscription of Taiwan during the Pacific War concentrating on experiences of conscripted soldiers

小野 純子*
Junko Ono

- 1 聞き取りの背景・意義
- 2 元台湾人徴集兵Aさんへの聞き取り調査
- 3 考察

要旨 本資料では、日本植民地時代の台湾人徴集兵における戦争体験について検討する。植民地台湾の兵隊における徴集兵の存在は、印象の強い志願兵の影に隠れてしまっている。そうなる原因としては、彼らの戦争体験の少なさが考えられるが、彼らの語りはまったく意味のないものだろうか。彼らの語りから何が見えてくるのか。本資料にあたって、元台湾人徴集兵Aさんに対して聞き取り調査を行い、それを基に元台湾人徴集兵に関する分析を行う。

キーワード：台湾人、植民地、徴兵、戦争体験

1 聞き取り調査の背景・意義

1990年代より台湾において、元台湾人日本兵に関する口述史の研究が盛んに行われるようになった。しかし、これら口述史の対象者は主に、元軍属、志願兵、高砂族が中心であった。そのため日本植民地時代末期に実施された徴兵制度によって徴兵された徴集兵の口述記録は極端に少ない。

本資料では、元台湾人徴集兵A（本人の希望により匿名）さんに対する「太平洋戦争期の台湾人徴兵における体験談」と題した聞き取り調査を実施した。台湾における代表的な調査は、蔡慧玉（1997）『走過兩個時代的人—臺籍日本兵』中央研究院台湾史研究所、周婉窈（1997）『台籍日本兵座談會記錄并相關資料』中央研究院 台灣史研究所籌備處などがあるものの、例えば、『走過

* 名古屋市立大学大学院人間文化研究科博士後期課程

『兩個時代的人—臺籍日本兵』では、26名の対象者のうち徴集兵の記録は1名であった。『台籍日本兵座談會記録并相關資料』では、70名近くいる対象者のうち、徴集兵はわずか3名であった。代表的な作品を見ても、徴集兵の記録がいかに少ないかわかるだろう。本聞き取り調査では、このように記録の少ない徴集兵を対象とする。

本資料ではAさんのみの一事例ではあるが、本事例から、これまでの文献における通説を疑ってみる余地があるだろう。

2 元台湾人徴集兵Aさんに対する聞き取り調査

— Aさんに関する情報 —

1924年生まれ

台南市出身

命部隊、軍旗小隊¹に所属

徴兵時、徴集兵代表として安藤総督の前で天皇への感謝の言葉を述べた人物。

(本来、筆者は匿名ではない調査を遂行する予定であったが、聞き取り調査に同意していただく際にAさんからの強い希望により、匿名とすることに至った。)

・第1回聞き取り調査

日時：2014年3月20日

場所：台北市内研究対象者自宅

時間：約2時間

対象者：Aさん（奥様も同席）

質問者：名古屋市立大学大学院人間文化研究科博士後期課程 小野純子

・第2回聞き取り調査

日時：2014年4月16日

場所：台北市内研究対象者自宅

時間：約3時間半

対象者：Aさん（奥様も同席）

質問者：名古屋市立大学大学院人間文化研究科博士後期課程 小野純子

・第3回聞き取り調査

日時：2014年4月21日

場所：台北市内研究対象者自宅

時間：約3時間

対象者：Aさん（奥様も同席）

質問者：名古屋市立大学大学院人間文化研究科博士後期課程 小野純子

・第4回聞き取り調査（報告及び指導）

日時：2014年7月30日

場所：台北市内研究対象者自宅

時間：約2時間

対象者：Aさん（奥様も同席）

質問者：名古屋市立大学大学院人間文化研究科博士後期課程 小野純子²

聞き取り調査質問項目と回答

① 年齢／出身／当時の所属部隊

1924年12月生まれ89歳

出身：台南

所属部隊：命部隊（軍旗小隊）...第71師団

② 徴兵されるまでの人生

・家庭状況、学歴、教育状況など

台南の公学校

↓

台南州立第一中学校（85%日本人、15%台湾人）

↓

台北旧制高等学校（文科乙：ドイツ語専攻）

↓

徴兵（旧制高等学校の卒業は、3年→2年半→2年と変わり、自分は、2年になった時の最初の生徒であった。2月卒業で、3月に軍隊に行った。）

↓

除隊後、帝大医学院（終戦で多くの日本人が帰り、人数に空きができたので、志願したら採用された。）

- ・徴兵のための身体検査は、いつ、どこで、どのような形で行われたか。
覚えていないが、いい加減な検査であった。自分は、片耳が悪いが乙種で合格した。

- ・いつ除隊したのか。
9月末に除隊、10月には次の準備をしていた。

③ 学校生活について

- ・一番印象に残っていること

1度だけであるが、日本人と口げんかになり、「チャンコロ」と言われたが、喧嘩に至るほどではなく、成績がよかったので、心の中でなんだ、お前と思っていた。意識の中で優越感があった。日本人と心のコンプレックスは特になかった。卒業した後、クラス会で賞状をくれるなど（戦後の功績を称えたもの）良い関係になった。以前は、あまり一緒にいることもなく、学校内では、台湾人同士の絆が強かったように思う。

英語の成績がよく、文学にも興味があり、自分で小説を書いてみたりもした。

- ・戦後、同窓会などはあったか。

台南一中、旧制高校は、台湾人も日本人も同窓会がある。大学は、台湾人の同窓会がある。日本人のほうがこういったことを大切にしている。

日本人がいるから、ある。日本人は台湾人と「絆」を続けたい。日本人は、戦後日本に帰り、その後とても大変であったので、台湾での日々がよい思い出になっている。

台南一中、旧制高校は絆を大切にしてきた。戦後は、現実に対する失望、落胆、怒りがあり、戦前に比べて日本人との絆が強くなった。

- ・日本統治時代、しっかりとした教育課程を学ばれていると思うが、それが戦後どのように役にたったか。

役に立った。中学で5年、旧制高校で2年という社会のエリートであったことを誇りにしている。

④ なぜ志願しなかったのか。／志願したがとられなかったのか。

志願するなどとはとんでもない話である。旧制高校を2年で卒業することが決まっており、卒業したら徴兵されるのがわかっている状況であったから志願はしなかった。「行く」のであるから志願の必要はない。ただ志願を名指しされたら嫌とは言えない状況であったであろう。忠君愛国の裏には様々なことがある。生活の糧を求めて志願したといえる例もある。

志願をするように言われたこともない。

・同世代の人たちの志願状況

皆が皆、忠君愛国ではなく、生活の糧として志願するものもいた。特攻隊、少年工や工場で徴用された人が戦後日本と台湾を結んだ。美談もある。志願という言葉の範囲はとても広い。志願させられた人、志願した人とそれぞれいる。少年工の志願は本当の志願である。彼らの場合生活の糧を求めての志願はありうる。彼らは、みな感謝感激で、戦後日本と台湾の関係を結んだ。

・Aさんの考える志願兵／徴集兵の違いとは。

- ・志願兵：志願兵は志願させられた人が多い。志願で行った人には、個人的な利点（生活条件など）もあった。
- ・徴集兵：表向きは日本人としての大義名分。召集の法令に従って、どんな人でも行かなくてはならなかった。私の生活体験では、教育を貫くはずであった人生経験に狂いが生じたというわだかまりもあり、戦時中や戦後、その時の仲間と絆を作るような生活体験はしていない。

・なぜ徴集された人たちはそれまで志願しなかったと思うか。

満20歳の人で志願する人は少ない。（徴兵されることが分かっているため）

・例えば、原住民は、皆が志願するのが当たり前であり、志願しないと冷たく見られたという例もあるが、そのようなことはなかったのか。

この話はありうる。しかし、自分は原住民の問題とは割と離れた状況下にあった。原住民や志願兵とは違った環境での生活で、話題にも上らないし、懸念もなかった。

⑤ 軍隊での様子

・一緒にいた台湾人は志願兵であったのか徴集兵であったのか、何兵であったのか。

当時一緒に軍旗小隊にいた台湾人は皆、徴兵。床屋、料理屋、土建屋、公学校の先生など様々な人がいた。衣食住を共にしただけ。私のいた部隊では、肉体労働訓練もあまりない。一等兵、上等、下士官などにいじめられるということもなかった。命部隊の軍旗小隊にはほとんど日本人がおらず30人の台湾人と幹部は日本人だった。（しかし後から考えてみると、自分たちが直接接していないだけで、ほかにも日本人などいたかもしれない。）9ヶ月のうち鉄砲をもったのは1回のみ。兵隊生活の中で印象に残っているのは、北港から嘉義（距離

にして約40km)へ銃など約20kgのものを持ち行軍する時に兵服が固く、雨が降って濡れ、晴れて乾き股ずれをしてとても痛かったこと。また、北港溪が氾濫した際にかりだされ、砂を積んだり、掘ったりしたこと。悪性のマラリアにかかり、連日の高熱でせん妄状態にあったこと。

精神的にきつかった。180度生活が変わってしまった。

・食糧はどうしていたのか。

食糧にあまり関心を示さなかった。軍隊生活が「嫌だ」ということがあった。1日1日を死なないように無事に過ごすことが大切であった。

・台湾人同士での会話においての使用言語および状況

日本語であった。教育程度が違ったり日本語の能力にも差があったりしたので、深い話ではできなかったが、日本語に困ることはなかった。日本人の少尉などとコミュニケーションをとるときは、日本語能力が高いと少し有利だった。プライベートな会話では、台湾語を使っていたと思う。(上官の前では一切使わないが。)

・対象者の所属していた軍旗小隊にいた台湾人はすべて漢族であったのか。それとも原住民や客家人などがいたのか。

ほとんどが台南から行った人たちで、福建系の人。原住民はいなかった。記憶にある軍旗小隊30名とおそらく他に日本人もいたのではないかと。毎朝起きて軍旗に敬礼をしていた。30名の台湾人は皆職業がまちまちであった。クラスごとに授業があり、内容は戦時状況などであった。(授業の内容などから、今考えるとおそらく敵が上陸した時に、敵を探ったり、攪乱させたり、住民との接触を妨げるためではなかったか。)

・日本の敗戦をどこでどのような状況下で知ったのか。

敗戦を知ったときは、終わったかとほっとした(学問を続けられるので)という感じだった。日本が負けるとも考えていなかったが、早くこの生活から抜け出したかった。当時の自分の感情は、嫌だ、緊張、寂しい、と言ったもので、日本人、台湾人というアイデンティティーの差別は、気にしなかった。後の人生など、実際的な個人的な問題の方が大切であった。敗戦を知ったときは、終わったか。という感じだった。教育や就学の問題のほうが大きかった。

⑥ 改姓名をした経緯(日本軍に入る前にすでに改姓をしている。その事情について。)

「国語家庭」を誇りにさせられていた。改姓名は、先祖代々の名前を変えるなんて何事かと

いう考えもある。養母は、愛国婦人会の会長をやっており、旦那が早々に亡くなり、息子もおらず、義理兄から息子をもらわないといけない状況で、ごくごく良い生活をし、政府の政策に沿って、改姓名をしたという感じ。養父の名前からとり改姓した。

⑦ 戦後について

- ・戦後、日本に対して何か感情があったか。

全般的に台湾人は、日本人に好感を持っている。日本教育を受け、育ったことを誇りに思っている。

- ・戦前と戦後で日本に対しての感情に変化があったか。

光復で堂々とできるという期待は裏切られ、現実はおみ溜めのような官吏たちであり、がっかりした。不正、汚職、私利私欲にまみれ、ぼろぼろの服の兵隊をみて、失望した。貧富の差が激しくなり、戦前は考えたことがなかったが、日本のほうが民主的で国家の為を思っていたと思うようになった。

⑧ 「日本精神」について。

- ・「日本精神」という言葉の意味

人をだませない。武士道、性と悪がはっきりしている、忠君愛国。教育勅語の精神であり、嘘をつかない。あっさりとした気持ちで純真な性格。もらった恩は返す、日本精神だから大丈夫＝人を裏切らないという意味で今でも使う。

ただ、軍隊生活という敗戦の色が濃く、いつ上陸するかもわからないという状況では、「日本精神」は関係なかった。考えられる状況ではなかったのが皆無。将来のことが心配でそんなことは考えられない。だから忠君愛国であったとは言えない。この意味のない生活を辞めたいと思っていた。「日本精神」を意識しなかった。早く軍隊生活を抜きたい。徴兵には、特別な経験がない。だから、絆などない。（自分は、将来の教育、職業、生活がとても心配であったので、特別なサンプルかもしれないがとの前置きあり。）

- ・戦後社会の「日本精神」と対象者の考える「日本精神」

戦時中に「日本精神」を考えたことはあるけれど、切実ではなかった。戦後、蒋介石がきて、汚職などもあり、また2.28事件や白色テロでことさらに「日本精神」とは反対のことを経験し、「日本精神」が浮き上がってきたように思う。

・志願兵の戦後社会での印象とは。

どこまでが制度的なもので、どこまでが自分の気持かはわからないが、忠君愛国で日本精神の人々。当時は徴兵もなく、「日本精神」は志願兵でのみ表すことができた。志願兵の中には「日本精神」を見つげられるかもしれない。

⑨ 最後に、日本の教育を受け、徴兵に行き、軍隊に入り、その経験は、人生の中でよかったと思えるか。(当時は思わなかったとしても)

学校教育に関しては、人生の上でも誇らしく、感謝している。しかし軍隊生活の6カ月は評価できない。行ってよかったとは思わない。もし軍隊に行っていなかったら、実母の死に目にも会えたかもしれない(軍隊生活中に実母死去)。友達も作らなかったし、特別な経験をしなかったから誇らしくない。エリートでありながら軍隊にいき、まったく異なる人々と一緒に生活をしたことも、人生の経験になったとは思はない。「絆」もない。

⑩ 天皇への感謝を述べた経緯及び感想

いつというのは、あまりしっかり覚えていないが、春頃(1~2月ごろ)。授業中に校長室に呼ばれ、代表として感謝の言葉を述べるよう依頼を受けた。1度は辞退申し上げたが、その場に父の友人である、皇民奉公会の参事だった台南高等学校の教授と弁護士がいたため、引き受けるしかなかった。断れない状況=命令であった。天皇への感謝状を書いた覚えはない。(おそらく用意されていたものを)読んだだけ。内容は「これで名実ともに日本人になった。」など。当時、旧制高校を卒業していたので、徴兵制度が施行した時の第一回の徴集兵の中で最高学歴であったから、自分が選ばれたのではないかと。

⑪ 第4回聞き取り調査の際の意見

人には建前と本音がある。今回の聞き取り調査においては、わざわざ日本から若手の研究者が自分に話を聞きたいと来たので、つつい本音が出てしまっている。(台湾人日本兵の口述研究が始まった当時)徴兵は研究される余裕がなかった。本当に日本人だと思っていた人はたくさんいた。でも建前も多くあった。「日本精神」という言葉はとても難しい。今の日本精神と昔の日本精神では意味も違う。Simple one question Yes or Noの方法でのアンケートを考えて研究をつづけるのがいいかもしれない。

3 考察

ここで本研究に関連する先行研究を確認する。台湾における徴兵制度及び徴集兵に関する研究は少数ではあるが、行われている。台湾軍及び徴兵制度に関しては、近藤正己『総力戦と台湾—日本植民地崩壊の研究』（刀水書房 1996）の第1章、第5章が詳しい。太平洋戦争期に至るまでの台湾軍の変貌が詳しくわかる。志願兵に関する記述も多く、そこから徴集兵に対するイメージも創り上げることができる。また、徴兵制導入に関連した問題点については、和泉司『日本統治期台湾の徴兵制度導入時に生じた「国語能力」問題』（2011）が詳しい。和泉は、軍隊という特殊で強圧的な命令系統を持つ組織において、日本語が理解できないことは致命的であり、それは軍側にとっても、徴兵される台湾人側にとっても不安要素であったと徴兵制度の問題点について指摘し、『台湾時報』と『新建設』という2つの雑誌に記載された台湾人の軍事動員及び徴兵に関する記事の台湾人兵士と日本語能力に関する記述について分析している。両先行研究で論じられる徴集兵と、本稿で聞き取り調査を行った元台湾人徴集兵Aさんとは少し異なったイメージとなる。

台湾軍司令部が置かれた当時、反乱鎮圧用部隊としての性格が色濃かった在台日本軍は、日中戦争以後、部隊を新設し増強し、五師団六混成旅団の兵員約20万名以上の守備部隊となった。この守備部隊の防衛強化にともなう兵力は、台湾人に求められた。当時、在台日本軍に防衛強化兵力として入営した台湾人の多くは徴兵制度により徴兵された人々であっただろう。

決して少数派とは言えない元台湾人徴集兵ではあるが、現在に至るまでにその研究や語りは非常に少ない。その原因と考えられるのは、Aさんが聞き取り調査の中で何度も口にしてきた「自分たちは軍において特別な経験をしていない」ということである。元軍属や志願兵、高砂義勇隊は、太平洋戦争下、南方方面で活動し、食糧の少ない過酷な状況下で日本のために戦った、戦死した仲間のためにといった特別な感情や経験がある。またAさんの調査中にも話がでた、元少年工たちは当時日本人から受けた優しさを忘れることなく、日本との絆を保ち続けてくれているという。しかし、終戦間際に徴兵され、米軍上陸に関する作戦準備と台湾本島防衛のためのみの軍隊生活を送っていた徴集兵には、そのような特別な経験がない。経験として記憶に残っているものは、行軍やマラリアなどのみであった。

植民地台湾の軍事動員を論じる際に、志願兵や民族に関しては特記して考察される。しかし、「階級」に関する指摘は少ない。Aさんのような高いレベルの層を調べることで、日本軍の戦争末期の様子がより明確に分かるのではないだろうか。

本聞き取り調査の成果としては、彼ら徴集兵は、志願兵とは異なるメンタリティーを持った人々ではないだろうか、という指摘が挙げられる。ここでは志願兵がどのような人々であったのか明確に定義づけすることはできない。志願兵には愛国心や日本精神、大和魂を持っていた人も

いれば、志願させられた人、また別の理由で志願をした人もいる。適齢で兵役に就かなくてはならなかった徴集兵とメンタリティーが異なることは当然である。本稿では、元台湾人徴集兵Aさんに対する聞き取り調査を行った。Aさんの発言の中にこの志願兵とは異なったメンタリティーが読み取れるであろう箇所がある。

⑤当時の自分の感情は、嫌だ、緊張、寂しいと言ったもので、日本人、台湾人というアイデンティティーの差別は気にしなかった。⑧戦時中に「日本精神」を考えたことはあるけど、切実ではなかった。・・・徴兵もなかった当時では、「日本精神」は志願兵のみで表すことができた。志願兵の中には「日本精神」を見つけられるかもしれない。

台湾人、日本人という意識をせず、自身は日本精神について切実ではなかったという発言のみからも、志願兵とは異なったメンタリティーを持っていたのではないだろうかと考えられる。しかしここには、Aさんが特異例であったのではないかという問題が生じる。Aさん本人も聞き取り調査の中で、自分は家庭のことが重要で、軍隊にいることを考えることのできる状況ではなかったと話していた。またAさんは当時では、かなりのエリートであり、家庭環境もトップレベルであった。AさんやAさんの周りの人々は社会の上層であり、志願という形をとることなく、別の形で国のために尽くせると自己認識していたレベルの人々であった。ただ彼らを特異例として捉えるのは早計である。現在までの先行研究で見落としがちになっていた階級の問題として検討しなくてはならないと捉えるべきだろう。Aさんのみの一事例で、志願兵と徴集兵のメンタリティーの違いを考察し、述べることはできない。この違いに関しては、きちんと志願兵に関する先行研究及び口述史記録を考察し直し、今後の課題として、研究を継続して行う予定である。

筆者の最終目標は、台湾人徴集兵における「日本精神」である。志願兵イメージの「日本精神」を徴集兵に置き換えて考えることは、今後の植民地研究において新しい一面となり、必要であろう。曖昧になりがちな台湾人日本兵のイメージ、そして明確な定義付けがされない「日本精神」を明らかにしていく意義深い研究である。また、言説的な「日本精神」の創造過程を徴集兵という別のメンタリティーからの視点を明らかにすることで、歴史的な分野及び口述史の分野において同化政策の評価にもつながり、植民地歴史研究の一助となるだろう。

当時20歳で徴兵された元台湾人徴集兵も戦後70年近く経ち、現在90歳であり、本テーマの研究は急がなければならない。今後は、Aさんへの再度の聞き取りに加え、戦後も日本精神と言っているような協力が積極的であろう志願兵とそうでない人々のメンタリティーの違いを考えるために、既存の口述史や回想など文献調査を行っていく。

- ¹ 命部隊は第71師団に属していた。第110師団の歩兵140連隊を基本としている。第71師団は、満州で南方進出に向け、訓練に励んでいたが満州から台湾に転進し終戦を迎える。1945年に第10方面軍に編入されて、台湾に転用された。台湾に上陸してからは、台中付近の陣地構築にあたっていたが、終戦を迎える。

〈第71師団司令部略歴〉

1945. 1. 25 満州出発

↓

2. 19 台湾基隆港上陸

↓

2. 20 台南州斗六到着 台中州大甲溪以南台湾州八常溪に渡る地域の防衛作戦準備

↓

1946. 1. 1 復員下令

↓

2. 26 台南州斗六出発

↓

3. 1 台湾基隆港出発

↓

3. 6 広島県大竹港上陸

↓

1946. 3. 7 復員完了 JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. C12122490300、「中央-部隊歴史全般-88」（防衛省防衛研究所）

〈第71師団における動き - 歩兵第87連隊および歩兵第88連隊の資料より - 〉

満州で編成されたため、台湾に上陸する前は、華北の作戦に参加していた。台湾北東部の基隆に上陸後、台南州（第87連隊）および、台中州（第88連隊）に駐留し任務を遂行する。台湾に転進して以来、マラリア患者が多数出た。終戦後は隊毎に駐屯地において、現地自活（主農耕）を行っていた。歩兵第88連隊においては、戦災都市の復興を実施していた。旭川師管区から補充されたため、北海道出身者が多かった。

- ² 第4回聞き取り調査においては、聞き取り調査に同意して頂く際に条件として提示された5月の学会発表の際の原稿の指導及び、学会発表の報告を行ったのみである。

[参考文献]

- 和泉司「日本統治期台湾の徴兵制度導入時に生じた「国語能力」問題－「国語不解者」の徴兵に関する『台湾時報』『新建設』の記事を中心に」（慶応義塾大学 日本語・日本文化教育センター紀要『日本語と日本語教育』39：123-144 2011）
- 近藤正巳『総力戦と台湾－日本植民地崩壊の研究』（刀水書房 1996）
- 『台湾徴兵 入営の案内』（皇道精神研究普及會 1943）
- 向山寛夫『日本統治下における台湾民族運動史』（中央経済研究所 1987）